

4人4色の昆虫標本“捕る、集める、作製する”

足立千恵・小野田弘之・近藤フミ子・辰巳淳子

ひとはくのセミナー「ひとはく展示課むし係」での作品です。「昆虫標本を作製する」という共通項だけで集まった4名が、2013年の4月からひとはくに隣接する深田公園を中心に、虫を捕ることから始めました。ビギナーからベテラン?まで様々なため、各自でテーマを考えながら虫を集め、標本を作製しました。まだまだ模索中ですが、展示方法にもこだわってみました。つぎのような作品を展示する予定ですので、ごらんください。

カマキリ誕生

子供のころ、カマキリの卵からたくさんの幼虫がでてきて驚いたことはありませんか?あの驚きを伝えたくて、今回この標本を作製しました。幼虫でも前足(かま)を振り上げ胸を張る様子から、「肉食の昆虫」らしさを感じました。

フナムシ

フナムシは昆虫ではありませんが、今回標本を作製しました。動かないフナムシをみる機会は少ないと思いますので、観察してやって下さい。

ハート虫をさがせ!

講座が始まり、自宅の庭でしか取れなかった自分が、仲間と虫を追いかけ先生からトンボの捕り方を一から教えてもらい、標本作りの方も、図書館で本を借りたり、みんなに教えてもらいながら、すこしづつ人に見てもらえるものができるようになりました。カメムシはいやなにおいをだすけれど、よく見るととてもかわいいカメムシもいることを知ってほしい。ハート虫(エサキモンキツノカメムシ)は、先生から一匹もらい、自分も北山植物園のコナラの落ち葉の中から一匹見つけた時は感動しました。子供達(と言っても30前後)も歓声をあげてくれました。ハート虫は身近に一年中いるのです。見つけたり、人に見せても感動ものですよ!

「魅せる標本」

私は「見てもらうこと」を主題に標本作りを考え、新たな挑戦をしてみました。バッタの標本に、「液体樹脂」素材を取り入れました。これは、表面にツヤをもたせ、内臓を抜いたお腹を膨らませ、標本そのものを丈夫にでき、飾るといふ点では利用できる素材でした。今後、標本への利用方法をさらに考えていこうと思います。そしてもう1点、ずっと気に入らなかったのが、標本箱の「研究者的使い方」でした。だから今回「見て飾れる・楽しめる・オシャレな」標本箱に挑戦してみました。標本のレイアウトを考え、様々な形に抜いたマットをはめ込み、箱の表面もアレンジしてみました。まだまだ思いつくことをやってみただけの今回ですが、

ほかにもあります。クワガタムシやチョウなど。当日をお楽しみに。

